

選者 川口孤舟

出席者 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 在間千恵 佐藤忠重 豊田穰 西澤國護

長谷見敏 (作者表記「びん」) 星田啓子 山崎亜也

投句・選句 伊賀山そらお 今井紀久男 熊谷國男 (選者表記「く」) 小早健介 後藤とみ子

朱牟田静雄 (選者表記「恵」) 高橋康敏 土谷堂哉 中川雅夫 福島正明

古川百合子 古田昇 宮内規雄 山田啓子 (選者表記「け」) 山内天牛

渡邊盛雄

選句のみ 今井紀久男 梅崎哲雄 (選者表記「くす」) 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子

高橋敏郎 橋口隆 早川允章 山本三恵

【互選句】 ○は選者の特選 ○は孤舟選者の選

十一點 ◎一斉に冲向く浦の鯉職 康敏 (そ・くす・忠・孤・五・と・恵・清・允・百・け)

十點 ◎古書房の梅雨や帳場の時計打つ びん (紀・孤・く・孝・恵・敏・堂・正・○啓・亜)

九點 括られて端居の古書や神保町 びん (紀・忠・○健・と・千・た・ゆ・允・百)

夏古書父の書棚の句ひして 啓子 (そ・と・孝・清・國・雅・○規・亜・○三)

八點 潮干狩己の影を掘つてをり 孤舟 (そ・忠・五・恵・堂・啓・け・三)

七點 ◎鬼平を読む籐椅子を軋ませて 康敏 (孤・く・孝・び・○允・天・盛)

六點 葉の香り木の香り食ふ柏餅 忠彦 (そ・紀・千・○孝・堂・盛)

下闇や古書肆の棚に師の句集 孤舟 (紀・忠・恵・康・啓・盛)

◎古書店に波郷全集夕薄暮 くに お (孤・清・敏・正・三・天)

無為の二字で足りるひと日も暮れかねて 恵洲 (くす・○龍・ゆ・敏・允・三)

◎鯉のぼり絶滅危惧種かも知れず 昇 (孤・健・千・隆・允・亜)

◎青嵐いつしか舊りしニュータウン 亜也 (孤・く・健・恵・康・堂)

五點 受付は目高一匹歯科医院 とみ子 (ゆ・び・○正・啓・天)

土筆摘む知らぬ同士も親しげに 國護 (そ・た・雅・規・天)

四點 半袖の軽ろき装ひ夏来る 忠彦 (くす・た・隆・規)

郭公の鳴き山荘の朝動く 孤舟 (く・○堂・百・昇)

雪解川過去も未来も呑み込みて 全 (そ・○くす・雅・規)

緑蔭の学生街のカフェテラス 全 (く・龍・正・昇)

◎その形(なり)は着ぐるみめくよ蝦蟇 (がまがへる) とみ子 (孤・千・恵・啓)

玲瓏たるソプラノ響き薫る風 千恵 (○紀・く・敏・規)

花の名を聞いては忘れ春果つる 恵洲 (くす・康・ゆ・け)

石楠花に満つる聖地や明けの鐘

堂哉

(敏・康・雅・盛)

三点

日盛りや斜めに渡る交差点

孤舟

(五・ゆ・〇昇)

◎道端で画集を選ぶ夏の町

五郎太

(孤・隆・び)

新樹光ときどき開くる骨董屋

とみ子

(五・正・昇)

長谷寺の終の一輪白牡丹

康敏

(た・國・亜)

夏落葉ひそと老兵職を辞す

堂哉

(健・敏・允)

緑風や八十路来し方陰と陽

ゆたか

(くす・孝・敏)

どうしても本音を言わぬ赤い薔薇

正明

(〇忠・健・清)

若き日の欠片探して神田祭

啓子

(健・孝・百)

偶々リハビリテーションの会で御一緒

聖五月コンセルヴァトワール出のご婦人と

天牛

(紀・と・け)

妻くれる誕生祝の麻の服

全

(龍・亜・三)

二点

短夜や日の出を待てず雨戸繰り

そらお

(清・百)

八種類飲む毎日が薬の日

忠彦

(龍・隆)

ゆつたりと威風の姿花菖蒲

全

(雅・け)

◎子と孫の厄を落せよ菖蒲風呂

全

(孤・國)

鈴蘭の小さきブーケ巴里遥か

五郎太

(と・正)

芍薬を供花に加え禪の寺

全

(清・び)

一階はワイン・バーなり神保町

全

(龍・び)

あらためて見合わす素顔風薫る

健介

(忠・〇亜)

武者ぶりの端午に適ふ初舞台

恵洲

(紀・康)

担ぎ手は大張り切りの夏祭り

千恵

(た・け)

◎緑蔭のぶらぶら歩き古書を手に

ゆたか

(孤・千)

菖蒲湯に浸かり心も爽やかに

全

(雅・規)

沙羅木陰花芽と老いを語る妻

雅夫

(敏・三)

デイゴ咲く喜界島なり世に遠し

びん

(と・隆)

青嵐積まるる古書を捲りをり

啓子

(紀・び)

無人なる石切り島の卯月かな

けい子

(五・敏)

薫風に人しれずあり清麻呂像

亜也

(紀・敏)

一点

コルセットはめりハビリ励む汗の午後

紀久男

(天)

大空をドローンと競ふ鯉幟

健介

(ゆ)

梅天に古戦場あり武者絵風

くにお

(百)

通院のバス待つ朝に若葉風

千恵

(康)

アジサイ咲く古書の町並みなつかしい

ただしげ

(敏)

夏めくや冷酒供に蕎麦たぐる

全

(盛)

紅薔薇の大輪活けて部屋薫る

ゆたか

(昇)

昼飯は和食に徳利さつき咲く

全

(隆)

フェンス越え兜は今や海渡り

國護

(龍)

ころもがえ黒美しき時流かな
 行乞の山頭火追ひ南風（はえ）の町 びん（た）
 夏めくや目立つ大きなバンドエイド 全（啓）
 夏日とや年々早し衣替え 正明（昇）
 安らぎの時間を妻と新茶汲む 百合子（千）
 オリブの花の弾けて古書の上 昇（國）
 サングラス掛け颯爽と出勤す 啓子（紀）
 村人が見守る佐渡の薪能 規雄（天）
 姿よき梅樹実の落つ降るがごと けい子（堂）
 書肆といふ言葉ありけり花槐 全（○盛）
 雷鳴や痛々しい友の深傷 盛雄（○五）
 盛雄（紀）



【句 評】 ※の付記されている句は、選句はしていないが、特別の想いや、句として気になる点の指摘など。

十一点句 一斉に沖向く浦の鯉幟 康敏

孤舟さん・・・海が湾曲して陸地に入り込んだところの漁村。鯉幟が一斉に沖へ向かってなびき、漁に出ている父親たちを励ましているのだ。

五郎太さん・・・浦に風が出てきた、急に泳ぎ出した鯉幟は沖に頭を向ける。沖向くが効いています。

とみ子さん・・・海風が心地よく青い空、青い海、泳ぐ鯉幟鮮やかに目に浮かびます。惠洲さん・・・漁村の景か。浦の鯉幟の写生句面白い。

允章さん・・・海風を受けて鯉が一斉に泳いでいる。青空が爽やかで美しい。百合子さん・・・新潟の海辺の風景でしょうか、海風にたなびく鯉幟、目に浮かびます。

十点句 古書房の梅雨や帳場の時計打つ びん

孤舟さん・・・微臭い古本屋に入ると、帳場の時計が丁度正時を告げた

くにおさん・・・梅雨時の古書店で立ち読みしている。突然、時計が鳴った。「あつもうこんな時間か」とあらためて時間を確認する。木造の古書店の柱時計が目につかぶ。似たような経験を時々することがある。

惠洲さん・・・古い柱時計が鳴ったのか。如何にも古書店の帳場に相応しい音。

啓子さん・・・十七文字で丸ごと雰囲気を伝えられる俳句の素晴らしさを改めて感じます。

亜也さん・・・出来すぎの感なきにしもあらずながら、いかにもという景。

九点句 括られて端居の古書や神保町 びん

健介さん・・・古書肆の店内に見受けられそうな光景で微笑ましい。こんな店でゆっくり本を探してみたくありませんね。

とみ子さん・・・店の外に、まとめ置かれた古本を、端居とは微笑ましい。

ただしげさん・・・神保町の古書街、いずれのお店でも古書を一括りにして端居させている。

その風景を上手く捉えて面白い。

允章さん・・・古本屋の店前の台に古本が積まれている。まるで古本が端居しているようだ。

百合子さん・・・古書街をぶらぶら歩きながらあちらこちらの店を覗く自由気儘な静謐の時間。
端居がとても効いていると思いました

夏の古書父の書棚の匂ひして

啓子

とみ子さん・・・お父様の思い出を、古書の匂いから懐かしく感じられたのでしよう。
規雄さん・・・古本の前に立つたら、父の本棚の匂ひがフツとしてきた。書物好きの父が懐かしい。いい句ですね。

亜也さん・・・プルーストのマドレーヌ。匂いでよみがえるあの日々、この日々。
三恵さん・・・たまたま、ゴールデンウィークに実家に帰り、今は兄がつかっている亡父の書齋に入ると、なぜかとても懐かしい匂いを感じました。その感覚と呼応している句です。嗅覚というのは視覚、聴覚以上にはるか遠くの「想い出」を呼び戻してくれると聞いたことがあります。

八点句

潮干狩己の影を掘つてをり

孤舟

五郎太さん・・・実景なのかどうか。哲学的な響きが素晴らしい。
恵洲さん・・・潮干狩りも昔話になりましたが、確かにこの句のような景色でしたね。

七点句

鬼平を読む籐椅子を軋ませて

康敏

孤舟さん・・・鬼平犯科帳を読み進めるうちクライマックスに。思わず手に汗握り、身を委ねていた籐椅子まで軋ませてしまった。
くにおさん・・・池波正太郎作品の一冊。読み始めたら時間を忘れ読み耽る。肩が凝って首を回すと体が動く。そのたびに籐椅子が微かに軋む。読書家にとっては至福のときでもある。

允章さん・・・鬼平は何度読んでも面白い。私の籐椅子はとつくに壊れてしまったが。
天牛さん・・・鬼平と軋む籐椅子がうまくマッチしていると思います。

六点句

葉の香り木の香り食ふ柏餅

忠彦

孝岳さん・・・何とも言えない柏餅の芳しい美味しさを、葉の香り、木の香りと表して食べたくなるような句になっています。お菓子屋さんのCMナンバーワン。

下闇や古書肆の棚に師の句集

孤舟

恵洲さん・・・薄暗い古書店の棚に、そこだけ何故か光が当たったかのように師の著書が目
に飛び込んできたのですね、きつと。

康敏さん・・・街路樹の影が濃い初夏の古書街で、師の句集を見付けた。私も古書店や古書市
で青邨先生の句集や随筆集を見付けた時は感慨深い。

盛雄さん・・・よくぞ見付けて下さった。『下闇』の季語が効いております。

古書店に波郷全集夕薄暮

くにお

孤舟さん・・・石田波郷を評価しない俳人も多いが、いまだに人気の作家である。
天牛さん・・・波郷全集を選んだところがかなりの俳人ですね。

無為の二字で足りるひと日も暮れかねて 恵洲

龍平さん・・・なんとも言えぬアンヌユイ。でも思いきれない一日が・・・。
允章さん・・・することがない、予定がない一日はとても長く感ずる。

鯉のぼり絶滅危惧種かも知れず

昇

孤舟さん・・・少子化時代で鯉幟もあまり見掛けなくなった。「絶滅危惧種」はまさに言い得

千恵さん・・・近頃は自宅の前などに立てるお家も少なくなりました。“絶滅危惧種”の表現が愉快です。

允章さん・・・都会で鯉のぼりを見ることは極めて少なくなりました。田舎でも子どもが少ないこともあり、余り見ない。消えてゆく風習かも。

隆さん・・・随分抑えた言い方ですね。「議事堂の空を泳ぐや鯉幟」ぐらい言ってもいいでしょう。

亜也さん・・・一見俳句らしくない中に込められた一種の愛惜。

青嵐いつしか舊りしニュータウン 亜也

孤舟さん・・・昭和30年代からブームだった公営団地。今や住人ともども老朽化。

くにおさん・・・一時は子供たちで賑わった団地も、やがて子供たちは社会人となり、団地を離れ残ったのは年老いた夫婦だけ。ただ、青嵐だけは昔と変わらず吹き渡っている。空き家も目立つようになった。こうしたニュータウンが近年増加している。

恵洲さん・・・この感懐は分ります。「新幹線」という語なども同様ですね。

康敏さん・・・多摩ニュータウンは50年の歴史を持つ。名前はニューでも古びてしまった。時代に即した価値と魅力の再生が計画されている。

五点句

受付は目高一匹歯科医院

とみ子

正明さん・・・のんびりしていて良いですね。

天牛さん・・・目高一匹で静かな待合室の雰囲気が良く出ていますね。

土筆摘む知らぬ同士も親しげに

國護

ただしげさん・土筆を摘みながらのほほえましい風景が見える。

天牛さん・・・無心に土筆を摘む者同士はこうなるのでしょうか!!

四点句

半袖の軽ろき装ひ夏来る

忠彦

ただしげさん・夏の到来を衣替えといった改まった服装の変化ではなく、ありふれた変化で表現しているのが面白い。

隆さん・・・上五と中七は付き過ぎか。「半袖で飛び出す町や夏来る」でも。

郭公の鳴き山荘の朝動く

孤舟

くにおさん・・・山荘の朝は郭公の鳴き声が始まる。郭公が鳴けば山荘の厨では俎板の音がし、煮炊きの匂いがして今日という一日が始まる。郭公の鳴き声が耳元に聞こえてくるようだ。

堂哉さん・・・夏山の気持ち良い雰囲気を巧く詠まれました。下五に早立ちの人の動きや朝食の準備に忙しい様子などが浮かんできました。

緑蔭の学生街のカフェテラス

孤舟

くにおさん・・・緑蔭のカフェテラスで学生が喫茶をしながら楽しく談笑している。「緑蔭」には「木下閣」と違う明るい語感がする。夏の学生街の景をうまく切り取った一句。

龍平さん・・・大学4年生本郷に居たのでよく神田へ。何時もゲルトピンチで名曲喫茶コーヒー50円か並寿司50円の何方かよく悩んだ。

《龍平さんは選句をされる少し前に会合で神保町に。その記憶が新しく、同時に二点句の「一階はワインバーなり神保町」を採られ、句評に左記一節を付記い

ただいています…編集担当」

先週は神田学士会館二泊。ランチ夕食+コーヒーに分け計5人の知友と旧交を暖めて来ました。今井という人は欠席だったが神戸に帰ったらすぐ、
〈来月退院か〉の朗報が入った!! 目出度し めでたし メデタシ。

その形(なり)は着ぐるみめくよ蝦蟇(がまがへる) とみ子

孤舟さん…ゆるキヤラは概して可愛いが、最近はがまがえるのように、グロテスクで妖怪めいたものも出てきたのであろうか。

千恵さん…あまり人気者とは言えない生き物。それを”着ぐるみ“みたいと感じた作者のユーモアセンスを感じました。

恵洲さん…拙宅の庭にも時に主みたいな顔をして現れます。児雷也なども想起されます。啓子さん…吃驚されたでしょうのに、目を止められた事象をユニークに詠まれ、且つ命あるものへの愛情をも感じさせて巧みです。

玲瓏たるソプラノ響き薫る風 千恵

くにおさん…女性の美しい高音が薫風に乗って気持よく響き渡ってくる。屋外でのリサイタルでしょうか。「玲瓏」という漢語と「ソプラノ」が取合せが面白い。

花の名を聞いては忘れ春果つる 恵洲

康敏さん…特に園芸種のカナモジの名は、長いものもあり、忘れると云うより憶えられない。

高野山

石楠花に満つる聖地や明けの鐘 堂哉

康敏さん…高野山の石楠花は頃が見頃だ。特に世界遺産の金剛三昧院は見事で、天然記念物の石楠花もある。

盛雄さん…四国八十八カ寺遍路満願の仕上げに高野山、宿坊に泊り朝の勤行に触れる爽やかな一句。参考句 石楠花を天上に描き庭に植ゑ 後藤夜半

三点句 日盛りや斜めに渡る交差点

孤舟

昇さん…夏の昼下り、交差点の陽射しの照り返しに眩暈して真つすぐ歩けない時があります。斜めに渡るといふ措辞が絶妙です。

道端で画集を選ぶ夏の町 五郎太

孤舟さん…古書店の外のワゴンに、著名な画家の素晴らしい画集が見つかった。隆さん…力まず神保町界限を表現した句。

長谷寺の終の一輪白牡丹 康敏

ただしげさん…花の御寺の牡丹の終わる時期、残った一輪の白牡丹。なんとなく寂しさを感じさせる。

亜也さん…非凡な句にした「終の一輪」への着目に感心。

夏落葉ひそと老兵職を辞す 堂哉

允章さん…老兵は役目を終えた落葉のようだ。

どうしても本音を言わぬ赤い薔薇 正明

忠彦さん…赤い薔薇には近づき難い美しさがあります。それをこのように表現にされたのが面白いと思いました。

偶々リハビリテーションの会で御一緒

聖五月コンセルヴァトワール出のご婦人と 天牛

とみ子さん・・・麗しい五月にふさわしい出会いですね。

妻くれる誕生祝の麻の服

天牛

亜也さん・・・「麻の服」が言外に老夫婦の年輪を描いて秀逸。

二点句

短夜や日の出を待てず雨戸繰り

そらお

百合子さん・・・日の出前に何となく目覚めてしまった、そのまま寝てしまうのは惜しい気がして私にもよくある体験です。

八種類飲む毎日が薬の日

忠彦

隆さん・・・高齢者は薬の効果が翌日まで続き効き過ぎることがあると言われました。老年医学会の司には「多すぎる薬と副作用」について説明があります。

子と孫の厄を落せよ菖蒲風呂

忠彦

孤舟さん・・・厄年を疾うに越した祖父としては、未来ある子や孫に、苦しみや災難に遭わなうよう祈るばかり。

鈴蘭の小さきブーケ巴里遥か

五郎太

とみ子さん・・・偶々五月初旬にパリに滞在していた時、この景に出会いました。見事に表現されています。

一階はワイン・バーなり神保町

五郎太

※句会でもご指摘あり。季語がありません。吟行でうっかりのご様子。

あらためて見合わす素顔風薫る

健介

亜也さん・・・コロナ明けの今年の五月ならではの句。それとない表現が好ましい。

武者ぶりの端午に適ふ初舞台

恵洲

康敏さん・・・菊五郎の孫・尾上真秀（十歳）の初舞台「音菊真秀若武者」。西洋人を父に持つ歌舞伎役者は、十五代目市村羽左衛門以来だ。将来が期待される。

担ぎ手は大張り切りの夏祭り

千恵

ただしげさん・・・待ちに待った夏祭り、祭り好きにはたまらない、納得。

緑蔭のぶらぶら歩き古書を手に

ゆたか

孤舟さん・・・予てから欲しかった稀観本を発見。喜び勇んで帰途につく。

千恵さん・・・お天気の良い気持ちの良い日に古本を物色して歩く。気に入った本を見つけそれを持ちながら又本探しに歩くゆったりした良い一日ですね。

デイゴ咲く喜界島なり世に遠し

びん

とみ子さん・・・下五の「世に遠し」が読者の想いを拡げてくれました。

隆さん・・・知人が喜界高校の校長でした。直行便はなく、奄美大島を経由するか。

「梯梧咲く喜界島なり別天地」でも。

一点句

コルセットはめりハビリ励む汗の午後 紀久男

天牛さん・・・窮屈なコルセットをはめていてもリハビリはしなきゃなりません。ご苦労なことです。午後も午後も。

梅天に古戦場あり武者絵風

くにお

※「梅天」（夏）と「武者絵風」（春）は季重なり。（康敏さん）

通院のバス待つ朝に若葉風

千恵

康敏さん・・・朝のバス停に、みずみずしい若葉を通した風が吹いてくる。気持ちのよい風だ。病院で待たされないといいが。

夏めくや冷酒供に蕎麦たぐる

ただしげ

※句会中にも「夏めく」と「冷酒」は季重なりとの指摘あり。

昼飯は和食に徳利さつき咲く

ゆたか

隆さん・・・神保町は学生街であり食堂の街である。私の学校も駿河台にあり、お世話になった。「和食」はもっと具体的な方がいい。「昼飯に天ぷら徳利さつき咲く」「いもや」の天ぷらは絶品。

フエンス越え兜は今や海渡り

國護

龍平さん・・・日本にはスウィーパーとか言う球が飛んできましたね。

ころもがえ黒美しき時流かな

びん

ただしげさん・・・今年の衣替えは黒が多くて、且、美しいと、流行の移り変わりを上手く詠んでいて、楽しい。

夏日とや年々早し衣替え

百合子

※「夏日」と「衣替え」は季重なり。(康敏さん)

サングラス掛け颯爽と出勤す

規雄

天牛さん・・・よっほど、本人は気取ったつもりでしょうね！その辺が上手く出来ています。

姿よき梅樹実の落つ降るがごと

亜也

盛雄さん・・・何年前か前、樹木ウィルス輪斑病が蔓延し、伊丹、宝塚、川西地区の梅ノ木の多くが枯れ、緑が丘公園の梅林は全滅した。「姿よき梅樹」が懐かしい。

書肆といふ言葉ありけり花槐

亜也

五郎太さん・・・昼前の神保町、漢籍を扱う立派な書店が目につく。中国原産の槐樹が実際に花をつけていたかは分からないが。その英語名の一つが scholar tree。幹旋が巧み。



【次回青葉会予定】

令和五年六月二十二日(木) 時間：十三時～十六時半

会場：世田谷区三軒茶屋施設 しゃれなあと 4階会議室

◇ご出席者は当季雑詠5句。投句は2句まで。事前にマウスの入力による清記を作成しますので、

ご出席者の出句予定句及び投句も当方(星田)に頂戴致します。

締切：六月二十日(火)中。※時間的に余裕なく申し訳ありません。

星田メール、或いはFAX (03-3421-9772)宛頂戴できれば当日配布の清記に反映致します。

☆三茶しゃれなあと 東京都世田谷区太子堂 2-16-7 茶沢通り宝くじ売り場が目印のビル

【青葉会報】

一、 例年より早い梅雨の晴間のような5月25日(木) 予定通り十時に集合、吟行を催行しました。

孤舟選者、びんさん、ゆたかさん、五郎太さん、ただしげさん、千恵さん、啓子の7名の参加でした。

午後一時からの句会には、忠彦さん、國護さん、亜也さんの3名も合流、吟行句は18句、当季雑詠12句、計30句を以ての選句となりました。吟行では時に陽も射し、爽やかな風が吹き抜ける気持ちのよい天候に恵まれ、神田神保町古書店街を三々五々歩いての作句(久方ぶりの神保町散策は大変楽しかった

たと感想頂いております)、カレーや和食など夫々好みのランチの後、午後一時から丸紅本社会議室での句会に臨みました。吟行には参加できずとも、そのお気持ちでご投句下さった方も居られ、お仲間の想いを共有したことでした。

句会はいつものように五郎太さんの司会でスムーズに進行、その後の皆さまからの選句結果を受け、康敏さん、次いで、びんさん、啓子が高得点となりました。因みに、康敏さんは当季雑詠、びんさん、啓子は吟行での句でした。今回は全体的に季重なりが多く、無季語も数点ありました。句会現場、選句ご連絡時など数名の方々からご注意をいただいております。

二、孤舟選者近詠

しやぼんだま雲となるまで見届けむ

正解はひとつにあらず二輪草

峠とは別れるるところ春の虹

みどりこの産毛の微光若葉風

鉛筆を耳に戻して鯉躍る

三、関係者近詠はお休みさせていただきます。

四、万里子先生のお別れ式が5月30日、6月1日と武蔵野市の日本キリスト教団 東美教会にて行われ、青葉会からは夫々のお繋がりから数名が参列されました。また、紀久男さんはご入院中で参列できなかったことから、青葉会世話人 今井紀久男として弔電を出しておられます。万里子先生は、うっすらと笑みを浮かべられ、穏やかに神の御許に召されたと伺っております。

今井紀久男さん、柿崎忠彦さんは、近々万里子先生の追悼句の募集をされるべくご相談中だそうです。要領決まり次第追ってご連絡致します。

五、会員近況

毎回選句及び選評を頂いている庄司龍平さんから、以下のような素敵なお知らせが届きました。

ご子息(庄司英生氏)がプロデュースする、日本酒「朔」の初年度の醸造酒が、フランスの日本酒コンクール「Kura Master2023」にて部門トップの評価となる「審査員賞」を受賞した、とのお知らせです。おめでと〜ございます!! [朔 - saku \(newmoon.jp\)](http://朔-saku(newmoon.jp)) ・「朔」が生まれた経緯や活動がわかります。青葉会の皆さまにはお酒好きの方が多いこともあり、興味深い現地フランスでの発表場面のサイトも併せて案内致します。 <https://kuramaster.com/ja/concours/comite-2023/laureats/> (長いので6分10秒位から)覧下さい↓とのことですが最初からなかなか興味深いです。日本語訳付)

六、【訃報に接して】

今年3月に 丸紅業務部出身の古川深志さんが鬼籍に入られたと知りました。万里子先生の訃報から思い出したエピソードを一つお伝えしたいと思います。

桧山社長の時代です。社長室で万里子先生のご夫君、川合友之(絹漱)さんが社長のデスクに腰掛け「おい桧山、元気にしつかりやっているか?」と宣ったそうで、その場に居た当時業務課長の古川さんは、どちらが社長か分からん、と吃驚されたそうです。昔はかなりバンカラな気風もあったのだなど愉快的な気持ちにもなりました。(紀久男 談)

令和五年六月十五日